「俳句展望」　上野犀行

昼月の混じりてをりぬ鰯雲　　飛田小鳥々

ひつじ雲去年は母がゐたベンチ

空青しプール営業最終日

読経めく飛行機音や秋夕焼

（『俳壇』十一月号「狐の嫁入り」より）

秋になり陽が弱まると、昼のうちから薄っすらとした月が姿を現す。目を凝らせば、鰯雲の中にも確認することができる。

昨年まで母は元気に外出できた。思い返すと、このベンチにもよく腰を下ろしていた。いまは事情がありもうここに来ることができない。「ひつじ雲」が切なさを増幅する。

もう夏が終わろうとしているのに、相変わらず暑く、空も真っ青である。「プール営業最終日」という一見突き放した表現により、まだまだ泳ぎ足りないという心持が伝わってくる。

空を行く飛行機の轟音。その均一で無機質なリズムに着目し、読経の声へ発想を飛ばしたところに、オリジナリティがある。本来全く違う二つのものが、「秋夕焼」の中で融合している。